



京鹿子

昭和二十九年九月
平成二十一年六月
通巻1017号

6月号

— 近 詠 —

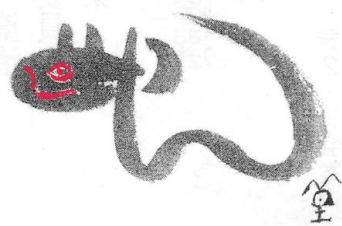
自己紹介 丸山佳子

つばめ来る城に一個の独尊亀

純粹な芽木を気づかひ根につまづく

松の芯に胸襟ひらく気にはまだ

現し世の前ばかり見て山笑ふ





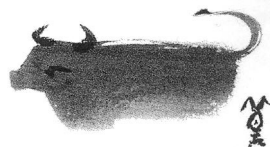
衣更　て私なり　に自己紹介
蛇穴を四軒トンネル私も貫け
松の静水の動得て卒業子
初燕に降るよ吹くよと気象官
あくびにも個性があつて春は逝く
白地着てこれほど心変るとは



豊 田 都 峰

清響集 その九十八

む さ し 野 は 遠 む ら さ き の 芽 木 林
墨 堤 の 庵 址 と や 芽 木 さ か り
花 の 散 る 木 洩 れ も 長 き 馬 場 の 址
拝 仏 の 径 や 辛 夷 の 花 ぐ も り
ひ と も と の 遠 か が や き の こ ぶ し か な
山 桜 磐 座 し る べ に 日 を か へ す



酒神のかぐらや花のふたみひら
黄の花を川すぢとして遠霞
川曲るあたり菜の花ひとしほに
春風の形なりに光悦垣の昼
しろがねの竹の葉の散る光悦寺
光悦を追へばらでんの春のてふ
花ちらす風とくぐりぬ吉野門
花ちるをふめば名妓の墓のみち

秀華採集

スイートピーになるまで言葉漉いてゐる

井上 菜摘子

淡く多彩な蝶形花は優しく春らしい、それらを表現する言葉を今こしらえてい
るといふ。特に「なるまで」や「漉く」といふ発想はふさわしい。

残雪や八曲一双比良の峰

田畑 耕之介

父の忌や早咲きの梅みづいろに

並河 富有野

前句の屏風仕立てがよい。そして「八曲一双」という横長の空間がよい。後句
の「みづいろに」といふ把握に作者が滲む。

近 詠

つばめ魚

鈴鹿 仁

かたつむりいしぶみにゐて石となる

(海道坊村句碑)

霊峰の雲のみちびき巢立鳥

露むくやひといろにして朝の彩

つばめ魚むかし尋ねし島の形

あごの海西郷どんの翳ちらり

たうたうと家紋のながれ武器飾る

歲月のはかなさ花の便りなく

(山田耕子氏追悼)

神麓集



陽は斜に 伊藤 希眸
 一陽来福手水のはしる生命線
 ふところに陽や大寒の戸を閉ぢる
 梟の首の回転陽の古木
 陽は斜に芽吹きうながす十三時
 音もなし陽に万本の霜柱

春泥 荻野千枝

春泥やもの憂き刻を踏んでぬし
 一行の誤植みすごし春の泥
 春愁や父祖に閑はる古墳出づ
 春菊の香の溺れある厨水
 春泥や身の置きどころさぐりけり

亀鳴く 川崎光一郎

亀鳴くや余生を充たす一行詩
 傘寿なる身の冴返る山河かな
 春寒や女子高生の膝小僧
 つと媚声闇をさすらふ猫の恋
 白梅に薄絹の風立ちにけり

朱雀遺跡復元 奥村 鷹尾
 冬陽射す磴の人影小刻めり
 散紅葉堤掃かせぬ林泉内匠
 網袋に柚子入れ二人だけの風呂
 錦木の核割る真の実は緋色
 散紅葉池面は抓みもて拾ふ

山茶花 森津 三郎

赤白の鉄塔しやんと寒明ける
 鳶の輪の輪となり切らぬ風気配
 寒明けの地球を覆ふ黒い雲
 夕方に間がある目白追ふてゐる
 山茶花が名札をつけて売れ残る

桜餅 丸井 巴水

三月の地へ下ろされし大時計
 青石の機嫌が戻る春時雨
 麓まで水草生ふなり産科閉づ
 眠らねば逢へぬひとこふ臙月
 さくら餅おまけの余生かほるなり

神麓集



春 隣 松本 鷹根

裸樹に寄り添ひ遺すものはなし
波頭北から北は雪が消す
溜まれば滲む筆先春隣
真つ直ぐを頼る畦道下萌ゆる
紅梅の陽に坐し過去をあたためる

含紅抄その八 沼田 巴字

紅椿表裏かはらぬ紅なりき
アネモネや世のしあはせをひとり占め
むらさきは人恋ふ色や海道忌
ひよ一羽かなた見てゐて陽炎へり
逃げ水や追へばすべては世迷ひごと

小堀 寛

給はりしをんなに連れ子おらが春
銀シヤリは金山寺味噌春炬燵
京雛の素がほふりむく蔵の中
黄塵や杜甫草堂の誹諧師
高樓に破璃愛づるひと花の冷

(五月分) 襦 寝 瓶 史

水草生れほぐしに通ふ魚心
神の田を四つ脚よぎる夕隴
郷はよしねぎごと叶ふ灌の虹
春夜噴く桜島しのこ糸閉ぢ香を聞く
ひもすがら郷の灯台飛魚光る

湯治行 襦 寝 瓶 史

岩湯出て羽衣ゆれの藤夕べ
湯の神にうぐひす色の番餅
花水木一鶯に晴るる水み錆空
牧牛の尻尾で応ふげんげ摘む
大山の路傍わらびに車混む



京鹿子集

豊田都峰選

亀岡 井上菜摘子

亀岡 並河富有野

別れかな菜の花の潮引いてゆく
妙案をほぐせば根深咲いてをり
歩かねば二月を陰画にしてしまふ
朝凍みやとがりし音に湯をかける
スイートピーになるまで言葉漉いてゐる

大津 田畑耕之介

もの翳のあれば身を寄せ浮氷
本流に入ればうたかた浮氷
残雪や八曲一雙比良の峰
春菊の香りほぐる朝の粥
何をもて忿怒といはむ雪解川

アリソン 伊吹 之博

春一番蔵の土戸は重すぎて
ひと口のワインに酔ひし春の夜
寒明けや皿にくづれし目玉焼
七曜に余白などなし蓬摘む
父の忌や早咲きの梅みづいろに
春めきてリスも遠出や万歩計
藤垂れてテイー招待す米紳士
朧月神を信ずる友明し
列乱る蟻のフェロモンまだ弱し
大愛に抱かれ砂漠の春近し